

漢字と中国人

—その愛憎の歴史から見えてくるもの—

愛知県立大学外国語学部 竹越 孝

はじめに

約 3300 年の歴史を持つ漢字と、それを使ってきた中国人は、文字通り切っても切れない縁で結ばれています。ただ、中国人は悠久の歴史の中でひたすらそれを愛でてきたわけではなく、間違いなくそれを憎んだ一時期がありました。ここでは、そうした漢字と中国人の奇妙な付き合いの歴史から見えてくることを考えてみたいと思います。

1. 漢字の構成方法

漢字というのはそもそもどのような原理で作られている文字なのでしょう。後漢の許慎が著した史上初めての漢字字典『説文解字』(紀元後 100 年頃)は、漢字の構成方法を6種に分けて説明しています。これらを推定される4つの発展段階に基づいて示すと以下のようになります。

■概念の段階

「象形」は物体の形を写生的に表現する方法で、例えば「馬」や「羊」といった漢字がこれにあたります。また「指事」は抽象的概念を象徴的に表現する方法で、「上」や「下」がこれにあたります。

■概念+概念の段階

「会意」は二つ以上の文字を組み合わせる方法で、そこには意味の派生が起こります。例えば「好」の字は「女」の字と「子」の字を組み合わせたもので、〈女の子〉という本義から、〈若い女〉→〈美しい〉→〈好ましい〉といった派生的な意味が生まれました。また、「休」は「人」と「木」によって構成されますが、〈木と人〉という本義から、〈よりかかる〉→〈休む〉といった派生義が生じたこととなります。

■音の段階

「仮借」はある文字を同音・類似音の概念として借用する方法です。そこでは、一つの文字が音を媒介にして複数の意味によって共有される、逆に言えば一つの文字が本義と借用義に分裂することになります。例えば、「隹」は本来〈尾の短い鳥〉を意味する文字で、一つの音を持っていましたが、当時〈Yes〉の意味を表す音がたまたまそれと同じであるか、非常に近いものであったため、〈Yes〉の意味を表記したい時には「隹」という文字を借りることが行われました。同様に、「才」は本来〈草の芽〉を表し、それは〈はじまり〉という派生義をも持っていました。当時〈ある〉を表す音がたまたまそれに近かったため、「才」という文字は〈はじまり〉の意味と〈あ

る)の意味に分裂したことになります。

■音＋概念の段階

仮借が広範に行われるようになると、一つの文字に互いに関連しない複数の意味が同居する同音異義の状態が大量に生まれ、コミュニケーション上支障をきたすことになります。そこで、仮借した字に概念を表す要素を組み合わせるといふ「形声」の方法が行われました。例えば、「隹」には〈尾の短い鳥〉という意味と〈Yes〉の意味が同居しており、そのままではどちらの意味で使われるかがわからず不便なので、〈Yes〉の意味を表す場合には「口」の要素を付け加えて「唯」の文字で表記されるようになりました。同様に、「才」は〈はじまり〉の意味と〈ある〉の意味を持っていましたが、〈ある〉の意味を表す場合には「土」を付け加えた「在」の文字で表記されるようになったわけです。一般に、音を借用した方の要素は「声符」、付け加えられた意味の要素は「意符」と言われます。現在漢字は5万字以上あると言われていますが、その90%以上は形声の方法で作られた文字です。

なお、『説文解字』にはこの他に「転注」という方法も説明されていますが、これがどのような方法であるかについては、現在でもよくわかっていません。

2. 中国近代の文字改革

■表音文字と表意文字

これまで人類が所有してきた文字は、大別すると音声の面に比重がおかれる表音文字と、意味の面に比重がおかれる表意文字とに分かれます。ごく大雑把に定義すれば、表音文字では一つの文字が一つの音を表し、表意文字では一つの文字が一つの意味(概念)を表すということになります。同じく表意文字であったエジプト聖刻文字やシュメル楔形文字がそのままでは生き延びられなかったのに比べ、漢字は今日まで生命を保ってきた、ほとんど唯一の表意文字と言えるでしょう。

■漢字の不合理性

表音文字と表意文字の最大の違いは文字の数にあります。表音文字の数は有限ですが、表意文字の数は無限です。なぜなら、ある言語の中で使用される音の数は有限であるのに対し、意味というものは無限の広がりを持っているからです。表音文字を使う限り、意味の数がいくら多くとも文字の数が増えることはありませんが、表意文字の場合は、意味の数だけ文字が必要とされることになります。

考えてみれば、漢字ほどそれを習得しようとする人間に大きな負担を強いる文字はないでしょう。アルファベットや仮名といった表音文字と異なり、漢字はその一つ一つの形に応じた意味と読音を覚えていかなければならないのですから。現在一般に通用している漢字に限ってもその数は1万であり、1万もの文字の形体を記憶することは容易ではありません。初等教育では5千ほどの常用字の形・音・意味のマスターに力が注がれますが、そのために費やされる時間の膨大さは言うまでもありません。

19世紀末、漢字というものに初めて出逢った西洋人がどのような驚きをもってそれを眺めたかを物語る一つの文章を見てみましょう。

中国人は大量の漢字を覚えなければ基本的な国語すら書くことができない。それゆえ、中国の勉強熱心な25歳の学生の読み書きの能力は26個のアルファベットを使用する10歳の英国の子供の能力に等しい。(E. クロッド『アルファベットの物語』1909年)

漢字という不合理な文字体系は、その習得に耐えられるだけの環境を持つ者とそうではない者との間に大きな乖離を生み出しました。そして、この乖離がいつの時代にあってもごく一部の支配者(識字層)と絶対多数の被支配者(非識字層)という社会構造を作り出してきたことは否定できません。

■文字改革運動と進化論

19世紀の末から20世紀の初頭にかけて、中国では漢字を廃止し、新しい表音文字を作りだそうという運動が盛んに行われました。ローマ字に範を取ったもの(盧贛章『一目了然初階』1892年)、速記に範を取ったもの(蔡錫勇『伝音快字』1896年)、数字を用いたもの(田廷俊『数目代字訣』1901年)、漢字を簡略化したもの(王照『官話合声字母』1903年、盧贛章『中国切音字母』1906年、章炳麟『駁中国改用万国新語説』1908年)といった具合に、様々なものが現れては消えて行きました。当時の中国を代表する知識人たちが、今の我々にとってはほとんど冗談にしか思えないような運動を大真面目で推進していたのはなぜでしょうか。これには、当時の時代背景が大きく関わっています。

この時期、中国には西洋の最新理論として進化論が紹介され、知識人たちにとって必須の教養となっていました。ただし、当時世界の大ベストセラーだったダーウィンの『種の起源』(C. Darwin, *On the Origins of Species*, 1859年)やハクスリーの『進化と倫理』(T. Huxley, *Evolution and Ethics*, 1893年)などは、嚴復の中国語訳『天演論』(1898年)によって、自然科学としての進化論というよりは、「社会進化論」とでも言うべきものに姿を変えて伝えられました。そこで盛んに鼓吹されたスローガンは、「適者生存」、「優勝劣敗」の原理でした。即ち、理に適った者だけが生き残っていく、優れている者は勝ち、劣っている者はいずれ敗れ去る、という思想です。

言うまでもなく、この時期は欧米や日本の帝国主義による中国侵略の時代とも重なります。漢字という不合理な文字体系を使用している限り、我々の中華文明はいずれ滅んでしまうに違いない、という恐怖にも似た感情が彼らを漢字廃止運動に駆り立てたであろうことは、想像に難くありません。

もちろん、この文字改革運動は成功しませんでした。現在の中華人民共和国では、次善の策として、漢字の画数を減らし簡略化した「簡体字」と、ローマ字によって補助的に発音を表す「ピンイン(拼音)」の方式が採用されています。ただし、毛沢東が1951年に指示した、「文字改革は行われなければならない、表音文字化の方向に進まなければならない」との方針は、公的にはいまだに撤回されていません。

3. 漢字と失語症

■失語症

では、漢字というものは本当に合理性のない、いずれは滅ぶ運命にある無用の長物なのでしょうか。必ずしもそうではない、ということが近年になって意外な分野からわかってきました。

「失語症」とは、大脳の言語中枢の損傷によって生じた、言葉の表出と理解が障害された状態のことを指し、聴力障害や視力障害、意識障害とは明確に区別されます。失語症の症状は、言語の基本的な4つの側面、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」のいずれにおいても現れる可能性があります。このうち「読む」に関わる障害に「失読」というものがあります。

「失読」は書かれている文字が認識できないという症状ですが、その症状を持つ患者は一般に仮名で書かれた単語よりも漢字で書かれた単語の方が理解しやすいと言います。言語訓練で漢字仮名混じり文を示した場合、漢字で書かれた名詞の部分は理解できても、ひらがなで書かれた助詞の部分が理解できないというケースもままあるのだそうです。

■文字の認識プロセスの違い

こうした事例から分かってきたことは、表音文字と表意文字では脳の中で文字を認識するプロセスが異なるのではないかということでした。表音文字の場合、文字の持っている情報はいったん音に変換され、その後で音が意味に変換されるという経路をたどります。それに対して、表意文字では文字の情報が音を経由することなく、直接意味に変換されるので、表音文字に比べて一つプロセスが少ないこととなります。そのため、言葉を音として思い浮かべることが困難になる失語症でも、漢字の理解は比較的障害されにくいのではないかと考えられています。

おわりに

漢字という表意文字はアジアに中国を中心とする巨大文明圏を形作り、またその社会構造を長く規定してきました。漢字が生まれた瞬間から、中国人はそれに支配される運命にあったと言えるでしょう。中国近代の文字改革運動が成功しなかったのは、中国人が漢字を捨てようとしても捨てられなかった、ということにほかならず、漢字と中国人はまさしく愛憎半ばする関係で結ばれています。そしてこれは、「漢字文化圏」に属し、同じく古代から漢字を使用し続けてきた私たち日本人についても言えることです。

<参考文献>

倉石武四郎(1952)『漢字の運命』岩波書店(岩波新書93)。

武田雅哉(1994)『蒼頡たちの宴—漢字の神話とユートピア—』筑摩書房。

佐野洋子・加藤正弘(1998)『脳が言葉を取り戻すとき—失語症のカルテから—』日本放送出版協会(NHK ブックス845)。